

卷頭言

下向井 龍彦

お待たせ致しました。『史人』第六号「坂本眞三先生米寿記念特集号」をお届けします。

昨年坂本先生は目出度く米寿をお迎えになりました。記念号に論考を寄せることができた人も、多忙のなかで原稿が間に合わなかった人も、研究から離れている人も、弟子・孫弟子一同、ともに先生のご長寿を心よりお祝い致します。先生はますますお元気で。表紙をちらと見ただけで、かわらぬご健筆ぶりがあります。冴えておられることがわかります。今もときおり私のカルチャー教室で代講をして下さいます。県立図書館にも己斐から徒歩で調べ物に通われています。

本号にも先生は論考二編をご寄稿下さいました。最初に玉稿を下さったのが先生でした。先生の米寿を弟子たちがお祝いする本号なのに、いただいてからすでに二年近くが過ぎてしまいました。長い間お待ちいただいたことを心よりお詫びします。先生には本号が記念号であることをお伝えしておらず、『史人』は「どうなったかな」と編集状況をお尋ねになるたびに、「あの…」と、言い訳をしていました。渡邊くんが先生のすぐあとに原稿を寄せてくれたほかは、私を含めてなかなか筆が進まず原稿が揃わなかったのです。多忙のなか原稿を用意してくれた方々に感謝します。次号に向けて先生はずでに御論考を準備されています。巻頭論文は、当然、先生の玉稿が飾ることにあります。本号に間に合わなかった方は、捲土重来、次号にお寄せ下さい。

先生の、年齢を超越した驚異的なご健筆ぶりに、研究に対する若々しい情熱がいつまでも横溢していることを心からお慶び致します。対照的に私たち弟子の怠慢ぶりが白日のもとに晒され、身の縮む思いです。率先垂範。いま私の学生時代・助手時代の研修旅行で、疲れた足取りの学生たちを尻目に、先頭に立って砂利道を踏みしめながら、目的地の古刹をめざしてスタスタ歩を進められる先生の力強い足取りを思い浮かべています。引率される学生はそのあとをフラフラついていくのがやつとでした。この師弟の関係は、今も

変わっていないようです。先生の研究に対する変わらぬ情熱を、弟子・孫弟子一同、しっかりと受け継いでいこうと思つています。お元気でご研究を続けて下さることが、弟子たちの大きな励みなのです。

さて戦後四回目的岩波講座が刊行中だが、古代4と古代5に王朝国家論の方法論に立つ研究者の論考は一編もなかったように思う。王朝国家論の凋落ぶりが表れているともいえよう。しかし一〇世紀後半画期論に立ついくつかの論考を読みると、王朝国家論を無視して書かれた政治史・軍事史・地方支配の論考は率直に言つて精彩を欠いている。財政史の論文は一〇世紀後半画期論を維持しつつも、九世紀末と一〇世紀初頭の転換も認めないわけにはいなくなつていふように思つた。久しぶりに参加した史学会大会での財政史の報告は、九世紀末と一〇世紀初頭の画期性についてさらに一歩踏み込んでいふように感じられた。すなわち最近の研究潮流には王朝国家論への回帰の予徴がうかがえるのである。今正秀氏・渡邊誠氏が今年・来年の東京・京都の学会で報告を依頼されたところにもその傾向が現れている。

平安時代史学界の主導学説として王朝国家論が完全復活することもそう遠い将来ではなさそうだが、もちろん平安時代史学界が王朝国家論一色に塗りつぶされることを望んではいないし、それはおぞましいことである。かつて「平安時代史研究の新潮流をめぐって——一〇世紀後半画期論批判——」のなかで「権門体制論は個別権門研究の方法としていつその純化をはかり、王朝国家論は国家史研究・国政史研究の方法としていつその純化をはかれればよい。社会の総体的把握には複眼的視座が必要である」と述べたとおりである。平安時代史研究を正しい道に戻すということである。王朝国家が論文タイトルに踊る日もやがて再来するだろう。たんなる流行ではなく、王朝国家論の研究方法を内面化した研究者が広島以外からも登場することだろう。

逆風のなかで私は王朝国家論の灯を守り続けてきたが、坂本先生から託された私の使命は私の定年退職とともに終わる。バトンには次の世代がしっかりと受け止めて引き継いでくれる。坂本先生の弟子・孫弟子たちによつて。